

「神話」と「音楽」をつなぐ二つの側面——そのひとつ「類似関係」に対する第二の側面である「隣接関係」において、「不変の要素」がワグナーの四部作『ニーベルグの指輪』に確認されたのが前項のことであった。

子供時代、といっても2歳児のレヴィ＝ストロースは、boulangier (パン屋) と boucher (肉屋) とのあいだにそれぞれの最初の音節 bou- が共通することがわかるから自分は字が読めるといいはった。この事実生まれつきの構造主義者であると自負してやまない。なによりも、共通であること、いいかえれば「同じである」ことが要諦なのだ。

で、この要諦の意味し、意義するところは？ そう問うべき脈絡を、本稿は追い、跡づけている。モービー・ディック然り、そして、また、部連島の隠れキリシタン然り。ここでも、ことあらためて問い返す——「同じである」、その意味し、意義することは？

『神話と意味』、その第三章「兎唇と双生児」はこの間に、前稿末尾にも言及したように、この箇所なりのかたちで応え返す。

宣教師 P・J・デ・アリアーガ神父に関連しての言及は前稿の参照に委ねることとして本題に入ろう。しかし、それにしても、「兎唇と双生児」とは随分奇妙な表題ではないか。この「と」に、レヴィ＝ストロースはいったいなにを読み込もうとするのか——もちろん、「同じである」ということであり、「不変の要素」にほかならない——「boulangier (パン屋)」と「boucher (肉屋)」、一見まったく別の二項間にそれぞれの最初の音節「bou-」が「不変の要素」、「同じである」こととして存在するように。では、「兎唇」と「双生児」という、これまた一見まったく別の二項間に、なにが、また、どのように「共通の要素」、「同じである」こととして存在するというのか。実は、もう一項が挙げられていた。それが「逆子」であることは、前稿末尾に、スペインの宣教師 P・J・デ・アリアーガによる報告書『ペルーにおける邪教の根絶』に確認されていた。

「逆子——兎唇——双生児」、この三項に通底する「不変の要素」、「同じである」ことを神話のいくつもの異文解析をへて、レヴィ＝ストロースは明らかにしていく。

まず、ブラジルやペルーに住む「インディアン」の神話——貧しい男が女を誘惑し子供を産ませるといふ筋書きである。

女は自分の夫になるはずの神に会いに行くところでしたが、途中でトリックスターがやってきて、自分がその神だと信じ込ませ、女はトリックスターの子を宿します。女はその後、…神に出会って、その子どもを宿し、のちに双生児を生むことになったのです。⁽¹⁾

この偽の双生児は、父親が異なるため、正反対の特徴を持つ。一方は、勇敢で「インディアン」たちの保護者で幸運をもたらす。他方は、臆病で白人の保護者でありたくさんの不幸な事件の原因となる。この神話がベースとなり、その異文として、ブリティッシュ・コロンビアの神話が紹介される。二人の姉妹が一見したところ別々の二人の男（実は同一のトリックスター）に騙され、それぞれ男の子を産む。その後、妹と分かれて姉は祖母に会いに出かける。その途上、丸太の陰にノウサギが隠れていた。

ノウサギは…娘が丸太をまたごとと足を上げたときに、その陰部を覗き見て、非常に不躰な冗談を言います。娘は腹を立ててノウサギを杖で打ち、その鼻を割ってしまいます。こういうわけで、ウサギ科の動物は現在、鼻と上唇が割れており、…この解剖学上の特徴の故に、人間についても“兎唇”と呼ぶのです。⁽²⁾

双生児の神話的含蓄の起源が、ここに求められる。鼻と上唇の割れ目が鼻にとどまらず、身体を通して尾までつづくなら姉娘

は一頭のノウサギを双生児に転化することになっていたはずである。アメリカ全土の「インディアン」たちは、レヴィ＝ストロースによれば、双生児ができるのは、のちに固まって子供となる体液が胎内で割れてしまうからだという観念を有していたといわれるが、ここにその神話的形象化がみられるのだろう。

さらに、双生児と兎唇の関係に逆子が連なることは、ヴァンクーヴァーに住む「インディアン」の神話に確認される。兎唇ということでみな嫌われていた娘が、人喰い女の鬼に他の少女たちとともに攫われ籠のなかに押し込められる。娘は、拾っておいだ貝殻で籠に裂け目をつけ、足から先に抜け出し助かったという。いってみれば、胎内から逆子として生まれでたわけだ。さらに、ひるがえって確認されるのは、通り道をふさぐ丸太の下に隠れて娘の陰部を覗き見たノウサギの位置関係とまったくの対照を逆子がなすということだ。こうして、双生児、兎唇、逆子の関係性が剔抉された。しかし、この関係性にどのような意味づけがなされるのか。問題は、そこにある。たとえば、ここに兎唇、すなわち、ノウサギがあえて介在することの必然性は？ ある部族では、ウサギは最高の神性として選ばれてすらいる。意味づけは、「不変の要素」であり、「同じである」ことである、いうまでもない！ だが、なぜそこにノウサギなのかということだ。

母親の子宮に二人ないしそれ以上の胎児がいるばあい、神話では一般に非常に重大な結果を生じるという。かれらは、先に生まれるという榮譽をもとめて闘う。悪い子供は近道をしようとする。母胎に裂け目を作り、貝殻で籠に裂け目をつけた娘同様、「足から」先に出ていこうとする。レヴィ＝ストロースは、ここに逆子を双生児と同一視する説明の根拠を求め、そして、いう。

双生児や逆子として生まれることは、ともに危険な脱出、あるいは英雄的と言っても良い脱出の前ぶれです。その子供がのちに、脱出を主導して一種の英雄になるからです。[もともと：筆者]英雄は時には残忍な殺害者になることもあります。⁽³⁾

このことばは、しかし、つづくことばに基礎づけられるときはじめてその意義を発揮しうるものでしかないのだろう。

本当に重要な点は、アメリカ全土の神話、さらに世界中の神話に、天上の力と下に住む人間との仲介者の役を演じる神々あるいは超自然的存在が見出されることです。⁽⁴⁾

最初に紹介したブラジルやペルーの神話をここにふりかえってみれば、女を孕ましたのは、まずトリックスター、ついで神——しかし、そこに登場した神とトリックスターは、別々の存在ではない、ある意味、同一の存在、しかも勇敢でありつつ臆病、保護者でありつつ敵対者、幸運をもたらす存在でありつつ、たくさんの不幸な事件の原因となるもの、つまりは両義的性格を兼ねそなえている。

ノウサギは双生児ではないけれども、双生児の始まりです。まだ完全な一個体ではあるけれども、唇が裂けて双生児になりかけている。⁽⁵⁾

だから、ノウサギはあるときは宇宙を秩序づける役割を受け持つ非常に賢い神であり、またあるときはつきからつきへと災難に出会う、あるいはそれをもたらす滑稽かつ残忍な道化といえる。

「不変の要素」、「同じである」ことが、ここに如実にものがたられている。

(1) レヴィ＝ストロース『神話と意味』、みすず書房、1999、p.38。

(2) 同 p.40。

(3) 同 p.44。

(4) 同。

(5) 同。